

世界遺産暫定一覧表記載資産候補に係る提案書 概要版

# 日本茶のふるさと 「宇治茶生産の景観」

Home of Japanese Tea, “Landscapes of the Production of Uji Tea”



平成26年3月

京都府 宇治市 城陽市 京田辺市 木津川市 宇治田原町 和束町 南山城村

# 1 提案のコンセプト

資産名称 日本茶のふるさと「宇治茶生産の景観」

Home of Japanese Tea, “Landscapes of the Production of Uji Tea”

**本資産は、日本において最も長い歴史を有する茶産地のひとつであり、現在も高品質の緑茶「宇治茶」を生産している宇治市を中心とした京都府南部の山城地域において、その茶生産及び当地域の風土により形成された日本茶業の理解のために欠くことができない重要な茶生産の景観である。**

**当地域は、中世以来の茶生産の技術的な革新により現代の日本茶を代表する「抹茶」、「玉露」、「煎茶」を生み出した「日本茶のふるさと」であり、伝統の継承と技術の革新を繰り返しながら約700年間にわたって宇治茶の生産を行ってきた。その結果、多様な土地を利用した多様な茶の生産、すなわち「抹茶」、「玉露」、「煎茶」の栽培に対応した平地のみならず丘陵や河川敷に展開される覆下茶園や傾斜地に展開される山なり開墾と呼ばれる露地茶園などの茶園と、茶生産に適合した施設を含む集落、水運など地の利を活かした茶問屋の町並みが形成され、現在に至るまで受け継がれている。**

本資産は、このような複数の茶種の生産により形成される多様な茶園と茶生産関連施設等を構成資産とすることから、その内容はシリアルプロパティ(複数の遺産を同じ歴史や文化群のまとまりとして関連付け、全体で価値を有するもの)となる。

中国を原産地とする茶は、人類が利用しはじめてから約2000年の歴史を有し、今日全世界で親しまれている保健飲料であり嗜好飲料である。なかでも緑茶は、近年の科学的な研究により、医学的にもさまざまな効果があることが証明されている。日本には、中国への留学僧や商人によって9世紀前期までに伝えられたとされ、健康によいとして独自の喫茶文化を生み出した。

京都府南部の山城地域は、政治と文化の中心地であり茶の大消費地でもある京都の近郊という好立地にあるとともに、茶の栽培に適した自然条件に恵まれていた。また、京都からの水運が開かれており、大都会ならではの豊富な下肥や菜種油粕などの肥料の流通も盛んであった。当地域の茶の生産は14世紀前期までさかのぼり、遅くとも15世紀中期までには日本を代表するトップブランドとなり、今日までその地位を保ち続けている。

また当地域において、「抹茶」の生産は、「茶の湯」を、「煎茶」「玉露」の生産は、「煎茶道」という喫茶文化を支え続けている。その一方で「煎茶」の生産は、急須で茶を淹れるという「日常生活に根付いた喫茶文化」を一般化させた。このように当地域では、「抹茶」、「玉露」、「煎茶」を生産することにより、国民諸階層を対象とした緑茶の喫茶文化の形成に大きく寄与している。

**「宇治茶生産の景観」は、「緑茶生産の伝統と革新の歴史」、「日本茶生産を特徴づける土地利用」、「日本茶生産の景観の類型」、「喫茶文化との関連」という点において、緑茶として独自の発展をとげた日本茶の生産の歴史とそれに関わる多様な喫茶文化を雄弁に物語る無二の茶生産の景観である。**

目次	1 提案のコンセプト	2
	2 世界遺産の登録基準への該当性	3
	3 普遍的価値の概要	4
	4 資産の全体を包括する図面	8
	5 宇治茶の歴史と発展	10
	6 茶の種類	11
	7 宇治製法の工程	11
	8 お茶のおいしい淹れ方	12

## 2 世界遺産の登録基準への該当性

該当する登録基準	内容
<p>(iii) 現存するか消滅しているかにかかわらず、ある文化的伝統又は文明(の存在)を伝承する物証として無二の存在(少なくとも希有な存在)である。</p> <p><b>【文化的伝統や文明の存在を伝承する証拠で希有な存在】</b></p>	<p>緑茶が中国から日本に伝えられて以降、京都府南部の山城地域では栽培・製法・加工において独自の工夫をこらし、緑茶を進化させてきた。当地域では、「抹茶」、「玉露」、「煎茶」といった多様な茶種の生産が行われており、それらの栽培法や加工法を反映した多様な茶園と茶生産に適合した施設を含む集落や地の利を活かした茶問屋の町並みをみることができる。</p> <p>本資産は、「<u>緑茶生産の伝統と革新の歴史</u>」を最も良く表しており、緑茶として独自の発展をとげた日本茶の生産の歴史とそれに関わる多様な喫茶文化を物語る上で、他に例を見ない重要な遺産である。</p>
<p>iv) 歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、あるいは景観(の類型・典型)を代表する顕著な見本である。</p> <p><b>【歴史上の重要な段階を物語る景観の類型】</b></p>	<p>京都府南部の山城地域では、茶の湯に使用される「抹茶」、今日広く飲まれている「煎茶」、高級茶として世界的に知られる「玉露」の生産法が開発され、宇治から日本全国へ広がった。現代の日本茶はいずれも宇治茶を源流とするものと言える。</p> <p>本資産は、比較的小規模ながら、「抹茶」、「玉露」、「煎茶」の栽培に対応した覆下茶園や山なり開墾と呼ばれる独特な露地茶園などの茶園と茶生産に適合した施設を含む集落の集合であり、「<u>日本茶生産の景観の類型</u>」を最も良く代表している。</p>
<p>v) あるひとつの文化(または複数の文化)を特徴づけるような伝統的居住形態若しくは陸上・海上の土地利用形態を代表する顕著な見本である。又は、人類と環境とのふれあいを代表する顕著な見本である(特に不可逆的な変化によりその存続が危ぶまれているもの)</p> <p><b>【ある文化を特徴づける土地利用形態の見本】</b></p>	<p>京都府南部の山城地域では、栽培・製法・加工という緑茶生産技術の革新の歴史が繰り返され、その結果、茶の生産地は平地のみならず丘陵や傾斜地、河川敷にも広がった。</p> <p>本資産は、多様な土地を利用した茶園と茶生産に適合した施設を含む集落、水運利用など地の利を活かした茶問屋の町並みなど「<u>日本茶生産を特徴づける土地利用</u>」を良く示している。</p>
<p>vi) 顕著な普遍的価値を有する出来事(行事)、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または実質的関連がある(この基準は他の基準とあわせて用いられることが望ましい)。</p> <p><b>【人類の歴史上の顕著な普遍的意義を有する出来事や伝統、思想、信仰、芸術との関連】</b></p>	<p>約500年前にはじまり京都を中心に展開された「茶の湯」は、今日、日本を代表する伝統文化として国際的にも広く知られ、「顕著な普遍的意義を有する伝統、思想、芸術」に該当する。茶の湯で飲用される「抹茶」は、16世紀後期から19世紀後期まで宇治茶師のみ生産が認められ、茶の湯を大成した千利休も宇治で生産された「抹茶」を第一とするなど、「茶の湯」を支え、「茶の湯」は宇治で生産された抹茶を支えるなど密接にかかわり合いながら発展してきた。今日でも、茶の湯に使用される「抹茶」のほとんどは京都府南部の山城地域で生産されている。</p> <p>また、山城地域は、「煎茶」、「玉露」の中心的な生産地として「煎茶道」を支え続け、その一方、煎茶は、急須で茶を淹れるという「日常生活に根付いた喫茶文化」を発信し、一般に広めた結果、家庭や職場、そして日本国内においてどこでも飲むことができる「暮らしのなかの飲み物」となるなど、<u>国民諸階層を対象とした喫茶文化の形成に大きく寄与している。</u></p>

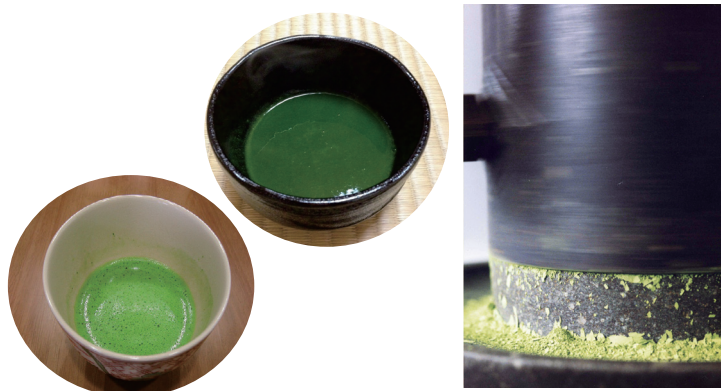
### 3 普遍的価値の概要

## 緑茶生産の伝統と革新の歴史／日本の喫茶文化の形成に大きく寄与

緑茶が中国から日本に伝えられて以降、京都府南部の山城地域では栽培・製法・加工において独自の工夫をこらし、緑茶を進化させてきました。その結果、「抹茶」、「煎茶」、「玉露」といった現代の日本茶を代表する茶を生み出しました。また、「抹茶」、「煎茶」、「玉露」を生産することにより、緑茶の喫茶文化の形成に寄与しました。

「宇治茶生産の景観」は、宇治茶の栽培、加工、流通に関わる土地利用と施設、そして開発、改良が重ねられてきた宇治茶生産の歴史の変遷と多様な様相を示す構成要素が全て含まれているとともに、それらの構成要素が相互に関係を有しながら現在に至るまで受け継がれています。

### 抹茶の誕生



12世紀後期までに、日本には中国から露地栽培の「抹茶」に湯を注いで飲む「点茶法」が伝えられ、14世紀中期までに、宇治はこれを受容し茶の生産がはじめられました。宇治において、茶園全体に葦や藁で覆いをかけ遮光する「覆下栽培」が始められ、世界に類を見ない「覆下茶園」が登場しました。

また、京都からの豊富な菜種油粕、干鰯、下肥の供給により、良質な有機窒素肥料が使用されました。これにより、露地栽培による渋みの強い「抹茶」とは異なり、覆下栽培による鮮やかな濃緑色をしたうまみの強い日本固有の「抹茶」が誕生しました。

宇治茶を製造・販売する宇治茶師は、合組といわれるブレンドを行ない、京都をはじめとする茶人の好みに合わせた茶を作るなどの創意工夫を重ねました。



### 煎茶の誕生



17世紀中期、宇治に萬福寺を開いた隠元などにより、揉み製の葉茶に湯を注いで飲む「淹茶法」が伝えられました。18世紀、宇治田原湯屋谷を中心とした茶農家で、蒸した茶の新芽を焙炉の上で手で揉み乾燥させる宇治製法（青製煎茶製法）が生み出され、色・香・味ともに優れた日本固有の「煎茶」が登場しました。この宇治製法は、19世紀後半までに宇治田原や宇治などの生産者によって全国に広められ、現在の「煎茶」の基本的な製法となっています。

### 玉露の誕生



19世紀前期には、宇治で覆下栽培と宇治製法が結びつき、宇治茶における製茶技術の至高ともいふべき「玉露」が生み出されました。18世紀から19世紀にかけて、京都の文人や画家たちにより「煎茶」を用いた文人茶が流行すると、宇治製法による「煎茶」や「玉露」が盛んに使用されました。「煎茶」や「玉露」に関しても、本来農作物の加工品であるため、多様な茶の品質や味を一定に保つために、茶商によるブレンドの技術が発達しました。

# 日本茶生産の景観の類型と特徴的な土地利用

## 宇治市域 宇治茶の歴史が、宇治川を中心として形成された風土の中に体現された文化的景観

鎌倉時代から茶が栽培されており、16世紀後半より覆下栽培が開発され、白川の砂質土壌の地で伝統的な本質及び寒冷紗による覆下茶園が営まれています。中宇治には、抹茶などの高級茶の製造と販売を独占した宇治茶師の屋敷をはじめとする茶問屋の町並みが残っています。



白川



白川



中宇治



中宇治

## 城陽市域 河川敷近くの集落内には茶工場建築物も点在し、自然(河川)と生業、生活が密接に関連する文化的景観

現在「てん茶(抹茶)」の産地として知られます。19世紀以降、覆下栽培が木津川河川敷に拡大しましたが、本地区はその典型例です。河川敷の平坦な砂地を利用し、伝統的な本質及び寒冷紗による覆下茶園で生産されるお茶は、松のような濃い緑をもつ独特のお茶となります。



上津屋



上津屋

## 京田辺市域 丘陵頂部には京都府南部の山城地域を代表する古墳が位置しているなど自然・歴史・生業の各側面で特徴的な要素を備えており、小規模ながら明瞭な文化的景観

玉露産地として知られます。木津川左岸の独立丘陵に集落が立地し、丘陵周辺の低地には水田と畑が、丘陵には集落及び覆下栽培の茶園、そして竹林が広がっています。集落内には茶工場建造物も点在します。河川と平地、丘陵といった地形の違いをうまく利用した土地利用が展開されています。



飯岡



飯岡